

そして季節はふたたびめぐり来る

1 夏の話

「おおーい、お疲れー！」

和倉温泉行きのサンダーボードが七尾駅に到着して程なく、七尾駅で下車したサンダーボードがしらさぎの元へ現れた。

今日は昨日から開催されている車両フェスタの二日目だ。今年は七尾線が電化してから丁度二十周年に当たるため、七尾駅構内にある機関区跡を使用してイベントが開催されていた。

前の週に金沢総合車両所で開催された車両所公開イベントでは、はくたか、サンダーボード、しらさぎが普段使用している車両が展示されたため、三人とも当日の仕事が割り振られていたのだが、今回のイベントで展示される特急車両は何故かしらさぎの使用している車両だけだったので、しらさぎだけがスタッフとしてイベントに参加していた。

しかも、先週のイベントは雨のち曇りだったのに、昨日と今日は雲一つ無い青空が広がっている。じつと

りした天気よりはいいだろうが、いかんせん暑い。外に数分いるだけで焦げてしまいそうだ。八月ももう終わるといいうのに、太陽の力は全く衰える気配が見られなかった。

そんな炎天下の中で参加者の誘導を行ったり、車内放送体験の参加券配布などに当たっていたのだ、疲れていないはずが無い。

「お疲れー、じゃないよ！本当に疲れたよ！」

今日のしらさぎは若干言葉の端々にトゲが見える。普段のしらさぎは滅多に声を荒らげたりすることがないのだが、この炎天下では仕方ないだろう。そして、しらさぎの機嫌が悪いだらう事を見越していたサンダーボードは、はい、差し入れとキンキンに冷えたスノーボードリンクのペットボトルを差し出した。

「差し入れ、持ってきた」

その言葉に、しらさぎは少しだけ表情を緩めた。サンダーボードが差し出したペットボトルを受け取り、礼を言う。

「ありがとう」

頂きます、というなり、キャップを捻って開けると豪快に飲み干し始めたしらさぎの勢いに、サンダーボードは目を見開いた。500ミリリットルのペットボ

トルは瞬く間に空になっていこうとしている。

「そんなに喉が渴いていたのか……」

程なくして、はい、と返されたペットボトルは空だった。もう一本飲むか？と訊けば、いやいいよと断られる。

濡れた口元をハンカチで拭いながら、しらさぎはきよろきよろと辺りを見回した。

「はくたかは？まだ来てないんだっけ？」

「この後の電車で来るはずだ。しらさぎも十五時までだろ？あと少しだから頑張れ」

「ありがとう。で、少し早めに来たからには、サンダーバードも手伝ってくれるんだよね？」

にこりと、わざとらしく満面の笑みで言われては、断れるはずも無い。しらさぎのこういう所がサンダーバードは苦手だった。

「うっ……ま、まあな」

「あつ、サンダーバードさん！来ていたんですか！」「げっ！」

サンダーバードを見つけるや否や、こちらに猛ダッシュで駆け寄ってきたのは、七尾駅の駅員だった。こんな所で立ち話なんかしてるんじゃないかと思ったが後の祭りである。

彼も二日間このフェスタのスタッフとして働いているのだろう、半袖から覗く腕は真つ黒に日焼けしている。

「いやー助かりますよーこの炎天下で何人か脱水症状になっちゃって人手が足りてなかったんですよ。しらさぎさんの手伝いに来てくれたんでしょう？」

「え、いや、その」

まくし立てられてしどろもどろになったサンダーバードは、ちらりとしらさぎの方へ視線を送った。助けってくれ、という意味だったのだが、しらさぎはにやにやと笑うばかりで肝心の助け船は出してくれそうにない。むしろ、増援が来て良かったと思っている、そんな表情だ。

完全に孤立無援となったサンダーバードは、結局駅員の強引なお願いを断り切れず、仕事に借り出されることになった。しらさぎと二人で大汗を掻きながらミニSLに並ぶ人たちの列整理や誘導などしていると、今度は和倉温泉行きのはくたかがやって来た。

駅とフェスタの会場を繋ぐ踏切が一時閉鎖され、目の前を和倉温泉へと向かう車両が通り過ぎていく。子供達は歓声を上げながらはくたかの車両を食い入るように見つめていた。

そして季節はふたたびめぐり来る

「なんか、ああいうのっていいよな」

「え？」

「子供達がオレたちの車両見て喜んでくれているって、いいよなって」

「ああ。そうだね」

しばし手を休めて、その光景に見入る。七尾線に乗り入れているのは短い増結編成なので、あつという間に目の前を通り過ぎ、再び踏切が開いた。次の金沢行き電車に乗るのだろうか、家族連れがぞろぞろとホームへ移動していく。

「こういう営業している駅の傍でのイベントって今まで経験が無かったけど、結構楽しいな」

「そうだね。来年もやるのかなあ。でももしやるとしても、次の展示車両はサンダーボードかはくたかに、って私は言うけどね。一人だけでやるのはもうこりこりだよ。しかも二日間……」

「分かった！分かったその愚痴は後で聞くから！」

これ以上この場所で愚痴を聞きたくない、サンダーボードは必死の思いでしらさぎを止めた。とにかく車両フェスタが無事に終わり、はくたかがここに来るまでの辛抱だと自分に言い聞かせながら。

時計の針が十五時を回り、車両フェスタは盛況のうちに終わった。参加者がいなくなつた構内でサンダーボードとしらさぎが後片付けの手伝いをしていると、はくたかがやって来た。先ほど見送つたはくたか号に乗って和倉温泉まで行ってきたらしい。

「お疲れ様！あれ、サンダーボードも働いてたの？」

「働かされたの!!」

「いいじゃない。お陰でほら、もう片付けも終わりそうだし」

大勢の駅員や社員がときばきと片付けをしてくれたお陰で、会場に設置されていたテントや椅子、案内板などはもうすっかり撤去されており、後は細かいゴミ拾いだけだった。会場のあちこちに貼られていた案内用の紙を剥がしてゴミ袋に突っ込みながら、サンダーボードは余計な労働をってしまったと悔しげな表情を浮かべる。

「まあまあ。働いた後の温泉と食事は格別だよ？」

「ぼん、とサンダーボードの肩を叩くしらさぎに、誰

しらさぎがそう呟いた。暑い中大勢のお客さんの相手をしなければならず、普段の業務と比べても大変なはずなのに、駅員も社員も皆笑顔を浮かべていて、すごく楽しげに見えたのだ。それに、展示内容も手書きのイラスト入りのものや社員のお宝コーナーなど、他から借りてきたものではなく、自分たちで作ったんだなと思うようなものが多かった。忙しい中、みんな得手分けて作ったのだろう。金が掛かっていると言われればそれまでだが、何となく暖かい雰囲気を感じたのは、そういう理由だったのだ。

助役はにこりと笑って、そう見えたんならぎつとお客さんも同じように思ってくれてるかなと言った。

「本当は特急も全部展示したかったんだが、支社に頼んだら、お前たちは繁忙期で忙しいから、誰か一人だけって言われてな」

「それで私だけだったんですか」

「どうしてしらさぎを選んだんですか？別にオレでも良かったんじゃない」

「サンダーバード」

たしなめるようにはくたかが言うと、助役は笑って、「しらさぎを選んだのは、この先にある和倉温泉が白鷺に由来のある温泉だからだよ。知ってたかい？和倉

温泉つてのは、白鷺が湯治していたのを漁師が見つけたって由来があるんだ。ほら、昨日今日とステージに出たあのキャラクター、わくたまくんって言ってるけど、あいつもその白鷺が産んだたまごって事になっているんだ」

「えっ！」

「しらさぎ、お前卵産めたのかよ……！」

「産めるわけないだろう馬鹿が！」

あまりにばかばかしい発言に、思わずサンダーバードの頭を殴りそうになったのをしらさぎは何とか堪える。そんなやり取りを見ていた助役は、大声で笑った。

「ははは、白鷺って言ってもおまえじゃないわな。まあそんな理由もあつて、誰か一人選ぶっていうならしらさぎかなつてなつたわけよ。しらさぎは二日間もこんな所で働いてもらつて、申し訳なかつたけどな」

「いえ、来年もしあれば是非呼んで下さい」

「さつきまでもう絶対嫌だとか愚痴こぼしてたのは誰だよ」

「うるさい」

しらさぎがぎゅつとサンダーバードの腕を抓つて黙らせる、はくたかが横から、

「俺たち、これから和倉温泉に行くんです。今まで何

度も来てるけど、温泉には行ったことがなくて」

「おお、そうか。楽しんでこいよ。たくさん働いた後だから、ビールがうまいぞー」

それじゃ、と戻っていく助役の背中に三人で頭を下げる。

「へえ、和倉温泉ってそんな由来があつたのか……知らなかったな」

「山中温泉も白鷺伝説がなかったつけ。しらさぎ、案内お前つていろんなどころで有名人なのな」

「だから私じゃないってば」

「あ、そろそろ俺たちも行こうか。あんまり到着が遅くなると宿に迷惑を掛ける事になるから」

「そうだね」

「行こう行こう！」

三人はゴミ捨て場を後にすると、七尾駅から電車に乗って一駅先の和倉温泉駅へ向かった。和倉温泉駅は七尾線の終点で、この先は第三セクターの「のと鉄道」が穴水駅まで続いている。そしてこの和倉温泉駅は和倉温泉郷への玄関口だ。

駅に着いて改札を出たところで、予約してあつた宿の迎えが来ているのを見つけた。

「皆様、おまちしておりましたよ」

「お世話になります」

「どうぞ乗って下さい。宿までお連れいたしますので」
運転手に促され、三人は宿の名前が脇に書かれているワゴン車に乗り込む。温泉街は駅から少し距離があり、駅から車で十分ほど走った所に今日の宿があつた。

和倉温泉は有名な温泉街で高級旅館がいくつも立ち並んでいるが、今回はくたかが代表で予約したのは、どちらかというところちまりとした小さな旅館だつた。高級旅館に泊まるほどの身分ではないし、そんなところは自分たちに不釣り合いだと思つたからだ。

女将に出迎えられ、案内された部屋は、三人で泊まるには十分すぎる位の広さがあつた。障子を開ければ、温泉街が見え、更にその先には海も見えている。

「お食事をご用意しますので、それまでどうぞおくらぎ下さいませ。当旅館の温泉は二十四時間いつでもご入浴頂けますし、この時間でしたら外の総湯も営業しております」

「ありがとうございます」

こうして丁寧にもてなされるのは慣れていないからか、なんだかこそばゆいなと思ひながら、三人は部屋の中央に置かれた座卓を囲む。

「お茶入れようか？」